

〈書評論文〉

日常の中のムスリム

—— イスラームに関する論争についての調査 ——

Nilüfer Göle,
Musulmans au quotidien:
Une enquête européenne sur les controverses autour de l'islam
 (La Découverte, 2015)

山下 泰幸

1 はじめに

2009年から2013年の4年間、ヨーロッパ21都市で主にムスリムを対象に、イスラームに関する近年の論争についての市民の反応を調査するためのフィールドワークが、著者たちのグループによって行われた。本書はそれによって得られたデータを用いて、メディアの論争や政治的な討論の場において欠落しがちである「普通のムスリム」たちの声を拾い集めることを目指した社会学的研究である。さらに必要に応じて、ムスリムに対するヘイトクライムの報道や、ヨーロッパとイスラームの文化を繋ぐ現代美術や建築などに関する知識も資料として用いられており、本書は現代ヨーロッパにおいてムスリムたちのおかれている状況を包括的に理解することを可能にしてくれる大著である。

著者の Nilüfer Göle はトルコ出身の社会学者であり、現在はフランスの社会科学高等研究院において教鞭を取っている。都市化され、学歴のあるムスリマ（イスラーム教徒の女性）たちの政治運動が専門であり、本書を含め、著者の研究の中核には常にヨーロッパ中心主義への批判という大きなテーマが存在してきた。また、自分の意志でスカーフを着用するムスリマの権利のための社会運動に積極的にかかわっていることでも知られる。

2015年1月にパリで発生した、風刺新聞シャルリーエブドを標的とした殺戮に端を発す

る一連のテロ以降、ヨーロッパにおけるムスリムを巡る言説は、暴力に対する正当な反発の感情を伴いながら、偏見と混乱の渦の中にある。一連のテロからわずか三カ月後に刊行された本書では、テロの背景となっているフランスの特殊な社会状況を総括するための特別な章が冒頭に設けられている。

本書の中核である第三章から第九章までは、近年頻繁に、そしてセンセーショナルに取り扱われてきたイスラームに関するさまざまな異なる論争を各章ごとに取り扱っており、フィールドワークで得られた語りを基に、それぞれの論争の核心と解決に向けた展望が考察される。そこで扱われる論争はそれぞれ、路上礼拝、モスクの建造、イスラームに関する風刺画、ムスリマが身に着けるスカーフやブルカ、日常生活へのシャリーア（イスラーム法）の適用、ハラール食品、ユダヤ人との関係性についてである。本書中では、これらの論争が逆説的にオルターナティブな大衆文化の出現に貢献しており、ヒップホップからハラールのハムまで、ムスリムの新しい文化はヨーロッパ的価値観と矛盾しない形で、現代的生活様式のイスラーム化を通して生み出されるということが明らかになる。

そして最後の結論において、著者が「共市民性（*cocitoyenneté*）」と呼ぶような、多様性が相互に承認される社会を構築するための主体性をいかにして獲得すべきかが語られる。

以下、本書評論文ではその中でも特にムスリマたちのジェンダーやセクシュアリティについて言及された箇所を中心に扱う。著者も指摘するように、イスラームに関する論争の主題の中核はいつも女性についてであり、そしてまた、公共空間と私的空間の境界を再定義し、コンフリクトを解決する役目を果たすのも女性なのである。

2 「普通のムスリム」の声の欠落

冒頭の特別章や第一章および第二章で語られる内容は、「普通のムスリム」の声に耳を傾けることの重要性についてであり、彼らの日常生活におけるミクロな実践を聞き取ることで、ムスリムたちのこれまで決して注目されてこなかった側面が浮かび上がってくる。これは常に「ムスリム」というカテゴリーの中の差異に注目し、その脱構築と細分化に寄与してきた、社会学におけるイスラーム研究の伝統を引き継ぐものである。「普通のムスリム」という表現は、「重大な社会問題としてのムスリム」以外のムスリムたちを指すための著者独自の呼称である。自分たちの信仰や文化をシティズンシップとうまく適合させている者、すなわち信仰実践とヨーロッパ社会での生活との間に特にコンフリクトを抱えていない者たちが注目されることは決してない。本書において著者は、フィールドワーク

によって多様なムスリムの声を集めることで、「文化の衝突」といった両立不可能性を強調する語りや、マスメディアにおける不安と憎悪をあおる言説から距離を取りながら、さらに現代のムスリムたちがその創造的主体となっている新しい文化の広がり注目する。

例えば著者が冒頭の特別章で強調しているように、2015年1月に発生したシャルリーエブド襲撃事件の背景となっている風刺画や、テロ発生後のフランス社会の反応は、まさにマスメディア上や政治の場において再生産されてきた典型的なムスリムの公的表象を問題の背景としている。

パリの学生たちを中心とした民主化運動である1968年の五月革命以降生み出されてきたカウンターカルチャーは、カトリック教会の影響下にある保守的価値観への批判と、性の自由化への要求という特徴をもって語られる。テロ事件で標的とされた風刺新聞シャルリーエブドも五月革命期に隆盛を極めたマイノリティ解放運動の系譜に位置づけられてきたが、半世紀近くの時が流れた今、五月革命的な思考およびカルチャーは、平凡でありきたりなものに落ちぶれた。その背景には女性の権利の拡大や世俗主義の発展が一定程度成果を収めたという重大な事実がある。しかしながらシャルリーエブドの挿絵画家や編集者たちは、フランス社会の世俗化が進行する中で権力を失ってきたキリスト教会の代わりにイスラームを標的にすることで、同様の戦いを継続しようとしてきた。彼らは、ムスリムの多様性や、マイノリティとしての社会的地位の不安定さを忘却した状態で、偏見にまみれたイスラームのメディア的表象を再生産した。著者はテロ事件の背景として、五月革命の系譜的なものがムスリムに対してストレスを与え続けてきたという事実を指摘する。

フランスにおいてライシテ（フランス独自の世俗主義的政教分離原則）と「表現の自由」はイスラームに対する差別的言説を正当化する論理となっており、歪曲されたこれら二概念は、ムスリムたちを他者化、悪魔化する。彼らは日常生活の様々な場面で「表現の自由」に忠誠を表明するよう迫られるが、一方でテレビや新聞などで盛んに行われているイスラームに関する公的な論争において、社会的マイノリティである彼らが自らの声を届けられる機会はほぼ存在していない。そのような状況において、イスラームの名のもとに繰り返されるテロ事件だけが社会的注目を集め、テロリストがすべてのムスリムの声を表出しているかのように認識されてきたのである。

3 「実験的公共空間」

第二章では本書のフィールドワークにおいて用いられた「実験的公共空間（espace public expérimental）」と呼ばれる社会調査のための装置について解説される。著者は一

連のテロ以降、ヨーロッパ的アイデンティティとイスラームとの関係性についての議論が再加熱する中で、社会統合のための戦略はイデオロギーではなく社会調査の結果に立脚すべきであると主張しており、フィールドワークの重要性を繰り返し強調している。

著者たちの研究グループは、特定の論争の主題に関連しているムスリムたちを一回につき15人ほど集め、最短でも4時間におよぶグループディスカッションの場を設けた。イギリス、フランス、ドイツ、スペイン、イタリア、スイス、ベルギー、オランダ、デンマーク、ノルウェー、ボスニア＝ヘルツェゴビナ、トルコの12か国21都市で被調査者として選ばれたムスリムは、多様な民族的出自を持ち、信仰実践者、非実践者、スカーフを着用しているムスリマ、していないムスリマ、移民をルーツとする者、改宗者、フェミニスト、イマーム（イスラーム指導者）など多岐にわたる。また、ムスリムだけでなく非ムスリムも対象に含まれており、これは多くの論争が「イスラーム問題」として取り上げられることで、ムスリム以外の当事者が逆説的に無視されることがあるためである。

第二章後半で詳述されるように、参加者の新たな出会いと相互作用によってオルタナティブな公共空間を具現化させるこのプロジェクトは、ただ各人の意見を収集するのではなく、ステレオタイプを破壊し、参加者同士の意見を止揚することを目的としており、著者はこのような場のことを「実験的公共空間」と呼んでいる。これは1960年代にブラジルでAugusto Boalによって行われた「被抑圧者のための演劇 (Théâtre de l'opprimé)」(Boal 1977) と呼ばれる実験と類似した試みである。社会的な被抑圧者をインフォーマントとしてではなく、舞台の上に立つ俳優のように扱うこの実験的手法において、参加者はドラマトゥルギーというより即興として自らの願望や欲求を語る。

イスラームに関する公的な論争は、これまでも常に議論のための公共空間を生み出してきた。しかし政治家やマスメディアの意向によって生み出された空間においては、ムスリムの多様性は捨象され、常にヨーロッパ社会とイスラームという二項対立に論争は還元される。そのような現実に対し、この装置を用いたフィールドワークは、理想的な公共空間の創造を目指すという意味で、社会調査であると同時にパフォーマンス的な側面を内包した社会実験である。著者によると、実験の最後のプロセスは、多様な主体が相互承認する社会を実現するための必要条件を考えることにある。

4 性的規範をめぐるコンフリクト

「成人したムスリマは布で髪を覆わなければならない」という宗教的規定は特にないとい

象徴として認識されている。Scott (2007) などが、ヨーロッパにおいてスカーフを着用している女性の多くは自らの主体的選択としてそれを身に着けていると明らかにしてきたにもかかわらず、非ムスリムの多くは、この習慣は性別隔離の伝統によって女性を強制的に私的領域へと追い込むためのものである、という根拠のない言説を生産し続けている。

例えば、第六章で扱われるデンマークにおけるムスリマの政治参加に関する論争からは、次のことが明らかになる。すなわち、ジェンダーやセクシュアリティに関する規範が押し付けられることで、スカーフへの過度の注目と政治的道具化、そしてそれに付随して、スカーフを着用するムスリマの政治的主体としての適性が疑われるという状況が生み出され、結果としてムスリムの声が政治の場に届く可能性は著しく減じられているのである。ムスリムの選挙候補者は、常にイスラームの価値観からの距離と、ヨーロッパの男女平等に関する価値観との近さを図るテストに直面するのである。

ジェンダーやセクシュアリティについての問題が政治化される中で、ムスリムたちを他者化し文明の囚人として扱うための「文明の衝突」という政治的レトリックは、言説の範囲にとどまらず、新たな統治の技術を伴って、移民の受け入れや統合のポリティクスに関連する司法や行政の場において特定の論理を発動させる。ここで筆者が危惧しているのは、具体的に、性的自由の価値観について忠誠を示すことが、帰化や国籍取得のために課せられる義務となるような状況のことである。

5 可視的なマイノリティからアクティブなマイノリティへ

ムスリマのスカーフはある種の神聖な親密圏を出現させるものであり、女性の「解放」に重点を置いたヨーロッパ的なフェミニズムとは全く異なる、保護され監視されるセクシュアリティの体制を象徴する。しかしフィールドワークにおける女性たちの生き生きとした語りから著者が明らかにするように、ムスリマたちが新しい公的・職業的空間を獲得しようとする中で、公的空間と私的空間との境界が揺るぎ始めている。

著者によると、白人フェミニスト (*féministes blanches*) によって主題として扱われてきた女性たちとは異なり、ムスリマたちは過剰に可視的なマイノリティである。民族的・宗教的・文化的にヨーロッパ社会のマジョリティと異質であり、その多くが移民を出自としている彼女らは、過剰な視線や言説に晒され続けてきた。公的な空間で生きる権利を望むムスリマは、ヨーロッパの自由主義の規範と、家父長制的なイスラームの規範の二重の抑圧に直面する。カウンターカルチャー的な五月革命期のアクティブなマイノリティによる運動としてのフェミニズムの潮流は、今日ではヨーロッパ社会のマジョリティの価値観

となった。ムスリマらがありのままの姿で公共空間に出現することは、イスラームの保守主義者からも世俗主義的なフェミニストからも決して望まれないのである。彼女たちが勝ち取りたい公的な領域は、男性が支配的である場所だけでなく、ある種の女性が占有している場所でもある。外部から押し付けられる規範を拒否するムスリマたちは、ムスリマの女性性のモデルを再構築するだけでなく、フェミニズムの再定義をも行うのである。普遍主義的で世俗主義的な西洋の主流なフェミニズム言説に対抗し、フェミニズムの多元的な定義と、女性の解放に関する多様な解釈が議論される必要があると著者は主張する。

例えばムスリマの知識人である Saida Ounissi と男性イマームとのスカーフをめぐる論争において、Ounissi がアクティブなマイノリティの立場から、イスラームに関する知識と西洋的な民主主義概念の両方を武器に、イスラーム的な「冒涇」「純潔」のような概念を脱構築していると著者は分析する。イスラームのテキスト解釈を独占する権威に対して、ムスリマの選択の自由を強調しながら批判を加える彼女の姿勢こそが、現代ヨーロッパで必要とされるフェミニズムであると言える。そしてまた、マイノリティであるムスリムたちの存在と行動を承認しつつ家父長制に対抗するための多元的な公共文化を出現させることができるか否かは、ムスリマとそうでない女性の間の相互承認と連帯に委ねられている。

また、例えば北米やイギリス、フランスで新たに出現した、LGBT の受け入れを表明し、男女を含めジェンダーによる区別を行わない集団礼拝を特徴とした「包摂的なモスク (mosquée inclusive)」は、シャリーアに違反しているとされ、ムスリムからもそうでないものからもスキャンダラスに語られてきた。しかしながらイスラーム的な「不浄」の概念を脱構築するこの試みは、ヨーロッパのイスラームの新しい勢力の出現を意味し、新たな規範をもたらす可能性を持ったアクティブなマイノリティなのである。

6 「共市民性」の構築

本書の結論部では、ヨーロッパとイスラームの交流の歴史をオスマン帝国時代まで振り返りながら、誰も差異を理由に排除されることのない社会を創造するための主体性として著者が定義する「共市民性」を、いかにして市民が獲得すべきかが語られる。

著者が指摘するように、これまでムスリムの存在は外部（中東や北アフリカ）からの侵入者という形で知覚され、ヨーロッパ内部の者は既得権益を守ろうと、排除の方法を模索してきた。すなわち、境界を造る者と乗り越える者の権力のゲームがヨーロッパの大衆生活を形作ってきたのである。政治と宗教を対立させる世俗的な社会において、ムスリムたちは政治の現象学的側面を作り出す。ムスリムの可視性はそれ自体が統合の失敗の証拠と

して繰り返し論争の主題とされてきたが、しかし Arendt (Tassin 2003) が指摘するように、アイデンティティを主張するために親密圏の外へ出る彼らの可視化への熱意と勇気は、それ自体が市民性の証明である。市民性とはパフォーマティブな行為を通して表明されるものなのである。

本書で紹介されるムスリムたちの新しい文化はどれも、ムスリムたちがヨーロッパ市民のネガティブな認識への対応として、信仰や実践を再帰的に問い直してきた証拠であり、その多くは対立や分断を乗り越える意思の表れである。例えば ISIS (イラクとシャームのイスラーム国) の暴力に対するムスリムたちの抗議行動である「Not in my name」はイギリスからヨーロッパ各地に広がった。このようなムスリムの多様性を示すパフォーマンスを通してアピールされる彼らの「共市民性」は、イスラモフォブやジハーディストという、集団の極端な均質性を防衛しようとする過激主義から、生活や信仰を防衛するための礎となる。

ヨーロッパ統合への無関心と全ヨーロッパ的公共圏の欠落が、民主主義の危機を生んでいると Habermas (2009) が指摘する中、イスラームに関する論争の周縁という全く予期せぬ場所においてヨーロッパ的な公共圏は出現してきた。しかし公共圏とは決してそれ自体中立的ではなく、差異とヒエラルキーを含んでおり、それはコンセンサスを築く場であると同時に、コンフリクトの出現の兆しの場でもある。ヨーロッパの市民は今まさに公共圏が多声的で対話的な空間となるように再編することを求められている。そのためにはムスリムたちの可視性が、本質化された他者性のしるしとしてではなく、新しい文化の担い手としての創造的主体性に基づくものである必要があると著者は強調している。

7 おわりに

「実験的公共空間」を用いたフィールドワークはオルターナティブな公共空間を出現させる社会実験であり、多様な背景を持つ人間同士の相互作用を生み出し、ムスリムたちをエンパワーメントすることを目指すものであった。また、本書は学術書であるにもかかわらず、全体を通して著者の故郷トルコの伝統織物に関する多彩なレトリックが用いられており、アカデミズムにイスラームの痕跡を意図的に持ち込んでいる。こうした著者の態度自体が、本書で紹介されているような現代ヨーロッパの新しいイスラーム文化を生み出すためのパフォーマティブな実践であると言える。しかしながらこの実験空間がその場の対話のみに留まらず、具体的にどのような持続的な効果を参加者にもたらしたかについては本書中で言及されておらず、著者は実験装置そのものがもつ効果を過大評価している感

否めない。

ヨーロッパの世俗的で自由主義的な価値観と合致するか否かという論点に還元されがちであった多様な新しい文化現象を、ムスリムの間の多様性と主体性という観点から並置し、評価し直すことで、本書はこれまであまり扱われてこなかったような若いムスリムたちによって担われている新しい大衆文化にも光を当てている。とりわけ日本においてはスカーフを巡る論争に関するもの以外、現代ヨーロッパのイスラーム文化についての社会学的な研究の蓄積は十分ではなく、それらを包括的に紹介する本書は貴重な研究である。

だが本書において、イスラームに関する論争がヨーロッパ全体として同様の論点・傾向に収斂していることを強調するあまり、21 都市においてフィールドワークを行っているにもかかわらず、フランス社会の歴史がヨーロッパ全体に過度に一般化され、国や地域ごとの歴史的文化的な差異が無視されている。その結果、ムスリムの間の多様性を語るために、対置されるヨーロッパ文化という一枚岩の概念を出現させてしまっている。また、著者のフェミニズムに対する理解についても同様の批判が可能であり、ポストコロニアリズムの影響を受けた多様なフェミニズムのあり方が模索されている中で、フェミニズムの均質性を過度に強調してしまっている。近年、ムスリマをフェミニズムの新しい主体として捉えなおそうとする Zahla Ali や Amina Wadud などによるイスラーム・フェミニズムの潮流が出現していることを忘れてはならない。

しかしながら一連のテロ以降、ムスリムとそうでない者との間の断絶がますます強調され続けるヨーロッパ社会の再統合のための指針として、社会学という学問分野から最初に示された回答の一つである本書は、フィールドワークに裏打ちされた十分な説得力を伴いながら、「共市民性」を有した生き生きとした主体としてのムスリムたちの姿をヨーロッパの読者に示すものである。このような試みは、あらゆる差異を超え、すべての市民が対等な人間同士として出会い直すことができる公共圏の創造のための重要な礎となる。

参考文献

- Boal, Augusto, 1977, *Théâtre de l'opprimé*, Paris: Maspero.
Habermas, Jürgen, 2009, *Europe: The Faltering Project*, Cambridge: Polity Press.
Scott, Joan Wallach, 2007, *The Politics of the Veil*, Princeton: Princeton University Press.
Tassin, Étienne, 2001, *Hannah Arendt: L'humaine condition politique*, Paris: L'harmattan.

(やました やすゆき・修士課程)